日蓮の足跡を市川にたどる

越谷市郷土研究会

法華経寺（江戸名所図会）

第二八三回　史跡めぐり

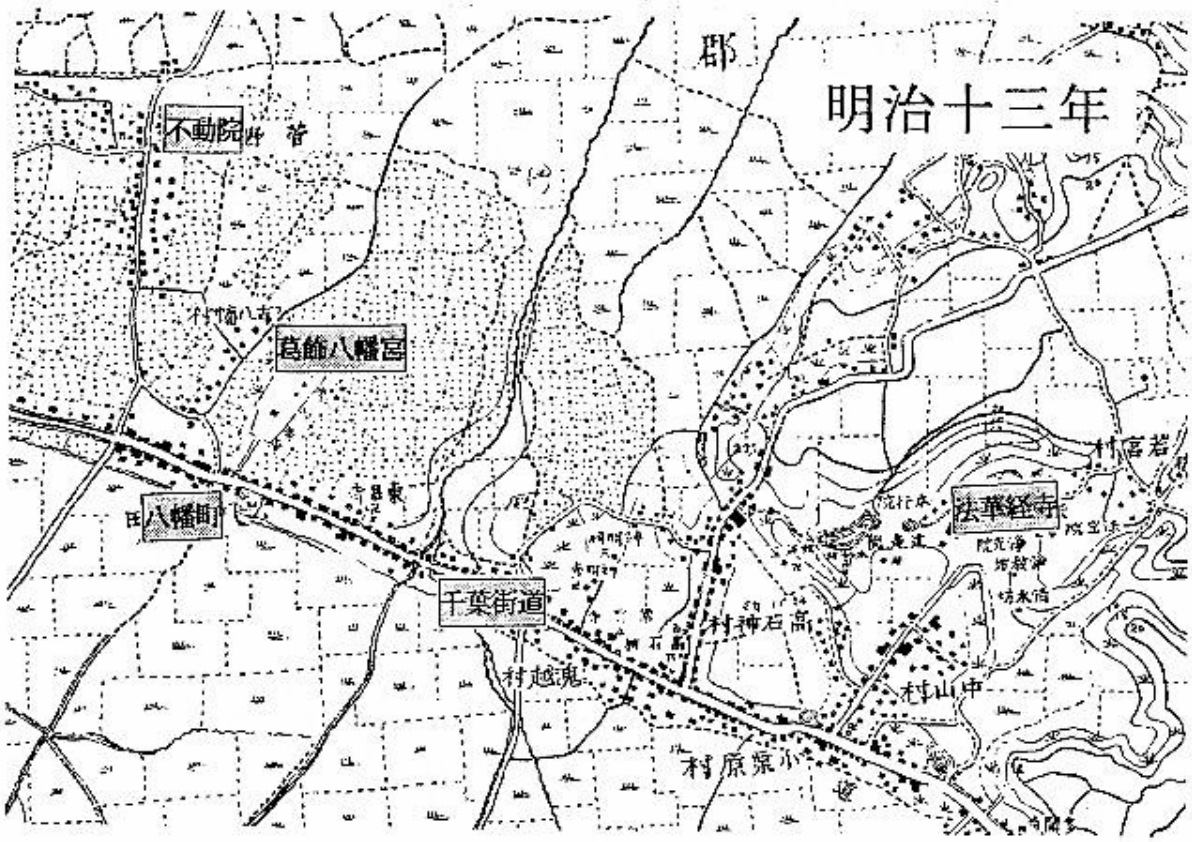
日　時　平成十二年十一月十九日（日）
集　合　南越谷駅　九・〇〇
行き先　日蓮の足跡を市川にたどる

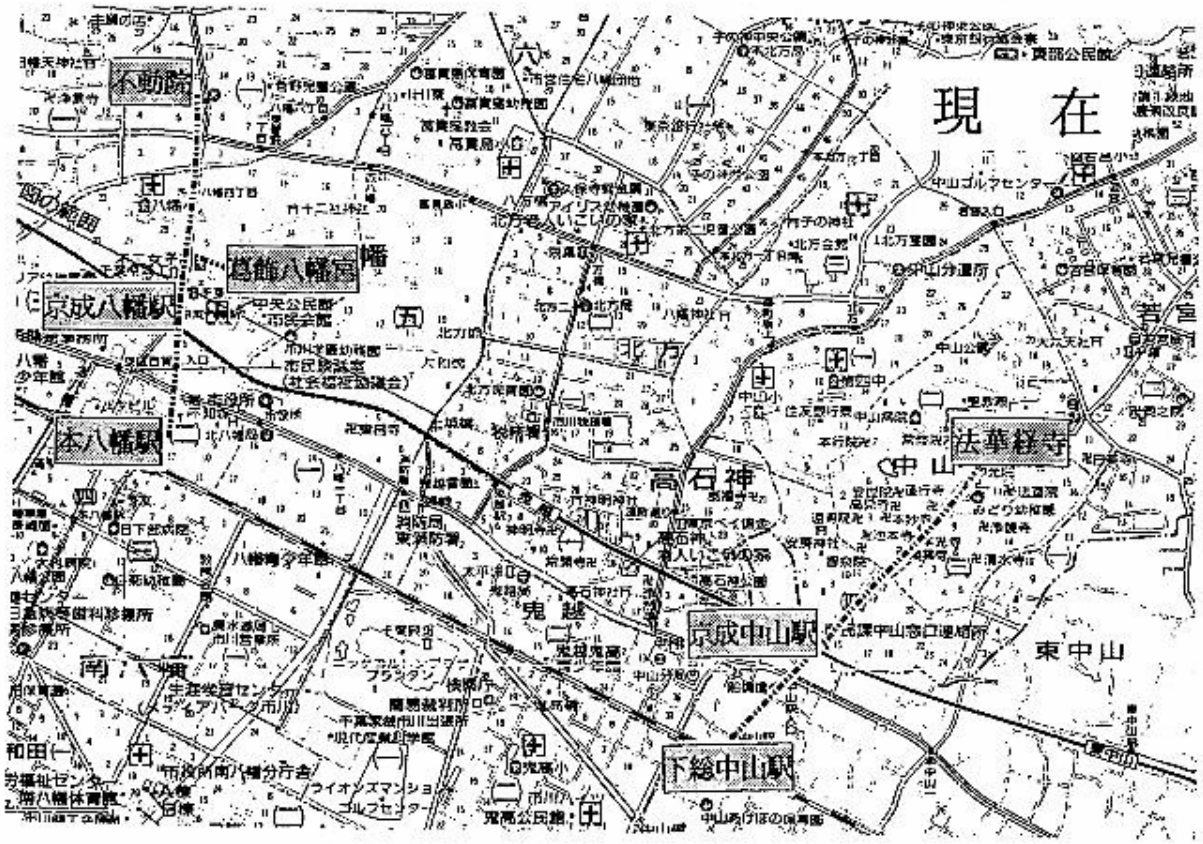
コース
南越谷駅＝（武蔵野線）＝西船橋駅＝（総武線）＝本八幡駅……不動院……
葛飾八幡宮……京成八幡駅＝（京成電鉄）＝京成中山駅……法華経寺……下総中山駅＝
（総武線）＝西船橋駅＝（武蔵野線）＝南越谷駅

案内者　小原勘三郎
参加費　二〇〇〇円
昼　食　各自持参

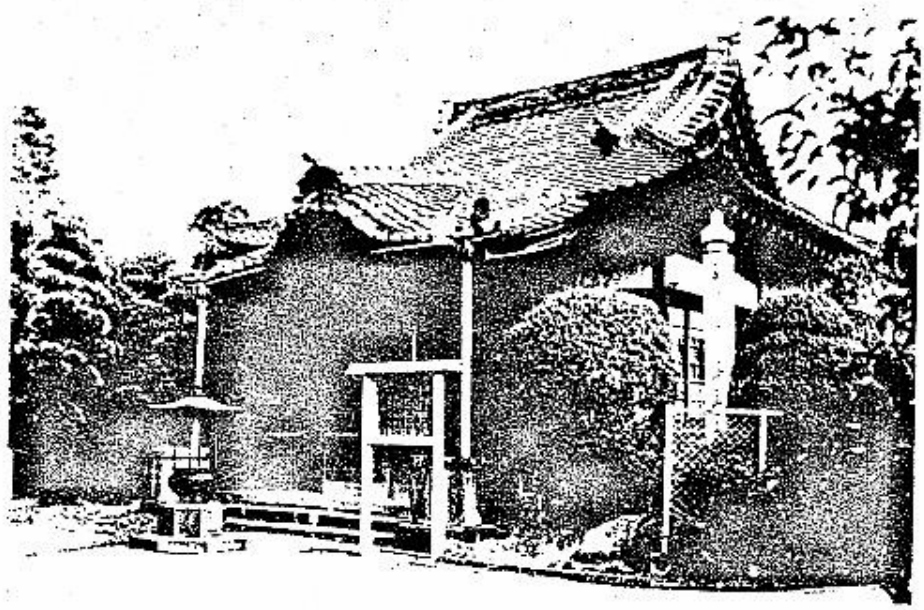
［法華経寺遠望］

越谷市郷土研究会


明治十三年
不動院
葛飾八幡宮
八幡町
千葉街道
法華経寺
村越塊
村山中
村原原小


現在
不動院
葛飾八幡宮
京成八幡駅
本八幡駅
法華経寺
高石神
京成中山駅
下総中山駅
東中山
鬼越
北方
中山

不動院



［不動院本堂］

天慶二年（九三九）、平将門が関東を制覇（天慶の乱）を平定するため、寛朝僧正が、弘法大師作の不動明王を成田に安置（のちの新勝寺）し、将門調伏を修した。

のちに成田不動尊と同木同作の明王を菅野の地に祀ったと伝えている。

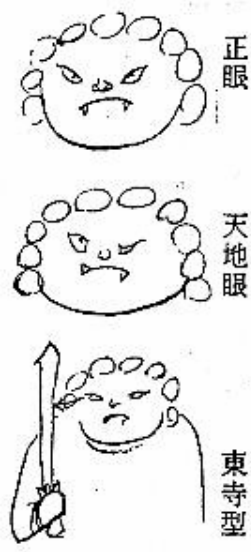
天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉が関東下向のとき、この本尊に祈願した。文禄二年（一五九三）、秀頼誕生にさいして、秀吉から寺領を賜った。

江戸時代、地元の有力者からの寄付があり、享保のころには、大岡忠相からも寄進があったと伝えている。

不動明王

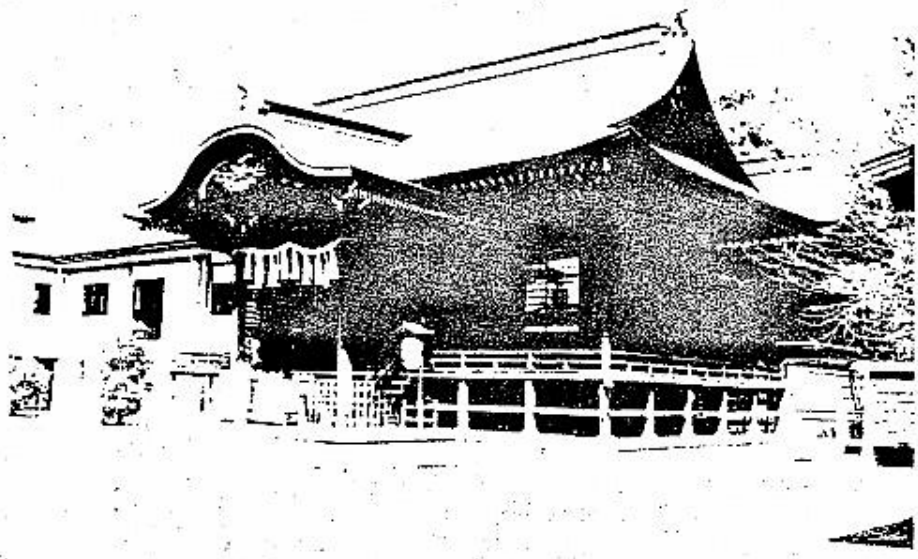
日本の不動明王信仰は、空海（弘法大師）にはじまる。平安時代、貴族たちの守護神として信仰された。日本の仏教信仰をささえる柱である。不動信仰は、インドにおこり中国でひろまった。しかし、遺例はすくなく、信仰と造像は日本でさかんになった。

密教独自の仏。忿怒像。明王とは真言を司る仏の意味。大日如来の使者（教令輪身）として、凡夫を導く仏である。



不動明王のまなこ

葛飾八幡宮



（東御前）
息長帯姫命（おきながたらしひめのみこと）
（神功皇后）

仲哀天皇の皇后、応神天皇の母。
武内宿祢とはかり、新羅を征した。
武運・安産の神として尊崇される。

（中御前）
誉田別命（ほんだわけのみこと）
（応神天皇）

仲哀天皇の皇子、母は神功皇后。
文学を奨励し、農業の発達をすすめた。
文教、殖産興業の神。

（西御前）
玉依姫命（たまよりひめのみこと）

鵜葺草葺不合命の皇后。
神武天皇の母。
婦道に功績が多く、育児の神。

葛飾八幡宮御由緒

御創建は平安朝の昔、寛平年間（八八九～八九八）宇多天皇の初期により下総の国総鎮守八幡宮として御鎮座、以来歴朝の御崇敬篤く、代々の国司・郡司をはじめ、国民の信仰深く、下総の国における最古文化、八幡信仰の中心となり、なかでも平将門の奉祭、源頼朝の社殿改築、太田道灌の社壇修復後、徳川家康の御朱印地社領五十二石の寄進等その尊信は篤いものであります。また、御主神応神天皇の御霊験により、文教の祖神、殖産興業、殊に農業守護の神として近郊の信仰をあつめております。毎年九月十五日の御例祭日より二十日まで、広大な境内で催される鹿島市の盛況さは、古来より関東一と称されています。

「大絵馬」（左・武内宿祢、右・神功皇后　安政年間）

▼千本公孫樹（国指定天然記念物）

多くの樹幹が集まって、根元から一本の大樹のようにみえる。千本公孫樹とよばれてきた。
樹高二十二m、根まわり十・二m、目通り十・八m。

神前右ノ脇ニ銀杏ノ大樹アリ神木トス。
此樹ノウツロノ中ニ小蛇栖メリ。
毎年八月十五日祭礼ノ時、音楽ヲ奏ス。
其時数万ノ小蛇枝上ニ顕レ出ツ。衆人ミテコレヲ奇ナリトス
（江戸名所図会）

▼川上翁遺徳碑

［川上善六翁碑］

川上善六（寛保二～文政十二・一七四二～一八二九）。明和七年（一七七〇）、善六は梨栽培をはじめた。美濃を訪れ、梨の良種をもち帰り、八幡宮の境内で梨園をひらいた。やがて江戸で高値で取り引きされた。善六は村人に栽培を奨励し、八幡一帯に梨園がひろまった。新しい産業の努力により、代官から褒美が下され、苗字帯刀が許された。

▼随神門

［随神門］

むかしは八幡山法漸寺の仁王門だった。仁王像は他に移され、左右大臣を配し、随神門となった。太い部材が使われ、門は江戸末期の様式。

随身（随神）
公家の貴人が外出のとき、身辺警護の官人。弓矢・剣をもつ。俗に矢太神（矢大臣）、左太神（左大臣）という。仏寺の仁王門にならったという。

正中山法華経寺

［法華経寺山門（赤門）］

若宮の領主富木常忍（日常上人）の法華寺と、中山の領主太田乗明の本妙寺が合体して、法華経寺となった。

一時は七千以上の末寺をもつ日蓮宗の五大本山の一つであった。

法華経寺には多くの建物、「日蓮真筆遺文」の書跡など数多くの文化財が伝えられている。

荒行堂では、毎年十一月一日の入行会から翌年の二月十日の満行会まで修行僧の百日間の荒行がおこなわれている。

境内には塔頭が多く、当寺に入る参道は門前町として、江戸時代から賑わった。

▼本阿弥光悦分骨墓

本阿弥光悦・一五五八～一六三七（永禄一～寛永十四）

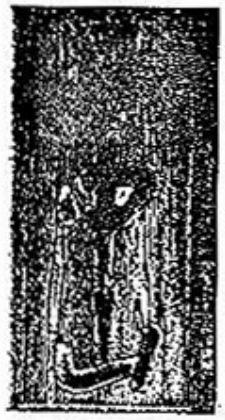
安土桃山時代・江戸初期の工芸家。本阿弥家は刀剣の鑑定・研磨を業とした。その一方、光悦は絵画・蒔絵・陶芸に才能を発揮した。茶の湯・庭づくりにもすぐれ、書道は光悦流を興し、寛永の三筆といわれた。

当代の知名人と交際し、豊臣秀吉・徳川家康・前田利家などの大名に重んぜられた。

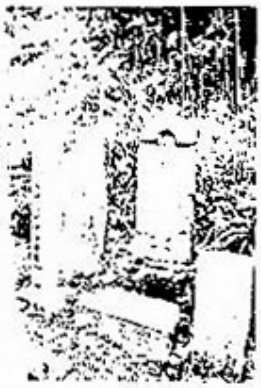
晩年、家康から京都の北・鷹ヶ峰の地を与えられ、一族や工匠をひきいて移り、工芸に専念した。

代表作に船橋蒔絵硯箱などがある。

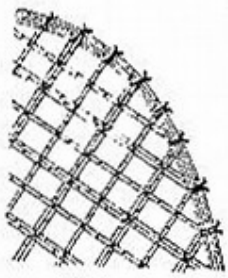
墓は洛北の光悦寺にある。



［扁額（光悦筆）］



［本阿弥光悦分骨墓］



［光悦垣］

［国宝・船橋蒔絵硯箱　光悦作］

［妙見堂］

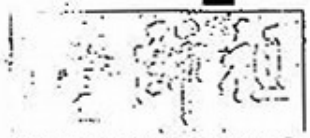
▼妙見堂

北極星・北斗七星を神格化した菩薩。国土を守り、災害を滅し、人の福寿を増すという。とくに眼病をなおす妙見法の本尊。主として日蓮宗で尊崇する。

▼祖師堂（重文）

祖師を安置する堂。大堂ともいい、間口十四間、奥行き十三間。屋根は入母屋造銅版葺。内部は五間四方の畳敷きの内陣としており、天井に文様を描いた格天井を用いている。須弥壇上に日蓮聖人像が奉安され、両脇座には法華経寺の六祖像がある。

［祖師堂］



［祖師堂扁額・光悦筆］

▼四足門（重文）

禅宗様の四脚門。鎌倉時代に鎌倉の愛染堂の門を移築柱は六本あるが、本柱の前後に二本ずつの控柱が立つ。禅宗様の装飾で、雲の彫刻（室町時代の特徴）がある。

▼法華堂

文応一年（一二六〇）の創建。四翼堂ともいう。現在の法華堂は室町後期の建築といわれている。日蓮聖人みずから一尊四菩薩を開眼安置する。百日百説法の霊跡という。

▼宇賀神堂

宇賀神（うかのかみ）、穀物神。転じて福の神とされ、弁才天と同じとみられ、天女形が多い。白蛇（へび）をまつったもの、狐の神とする説もある。「うかの女」食の女、食物の神。女神という。

［四足門］

［法華堂］

▼聖教殿（しょうきょうでん）

［聖教殿］

法華経寺には、「立正安国論」（国宝）、「観心本尊抄」（国宝）をはじめ九六点の書跡が保管されている。このうち聖人の「御真跡」「御真筆」（いずれも重文）は七六点におよぶ。

これらを安全に保管し、将来にそなえ、昭和六年、インド様式の円型石造の殿堂が立てられた。年一回、十一月三日に開扉して虫干し（お風入れ）がおこなわれる。

▼日蓮の三大部

一、「立正安国論」（国宝）　文応一年（一二六〇）

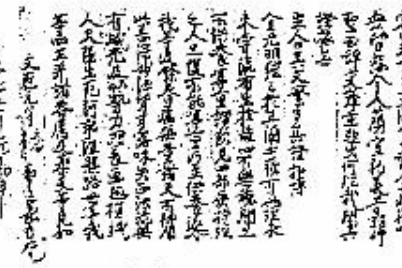
宿屋の主人と客との九項目の対話。主人の説得で客がしだいに信仰をふかめていく。漢文体。執権北条時頼に送る。治世の要道を説き、度々の天変地異は浄土宗などの邪法のひろまりによるとし、法華経の正法をひろめるべきだと主唱した。

二、「観心本尊抄」（国宝）正式名『釈迦滅後五五百歳始観心本尊抄』文永十年（一二七三）

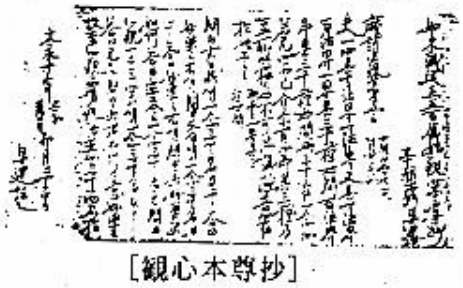
漢文体。釈迦入滅後の末法時に、初めて最高の真理があらわれる。真理の大切さを論じた書。この真理は信奉すべき本尊であり、心の支えとして、心に観られるべきとして、「観心本尊抄」と名づけた。

三、「開目抄」　文永九年（一二七二）

明治八年焼失。和文で一般むけ。インド思想・儒教・老荘から仏教へと説く。法華経こそ最高の経典であること、それを末法にひろめる法華経の行者としての自覚を述べたもの。一種の比較宗教論である。



［立正安国論］



［観心本尊抄］

日蓮の略歴

年号	年齢	関係項目
一二二二 貞応元	一	安房・小湊で生まれる
一二三三 天福元	十二	清澄山へのぼる　蓮長と名のる
一二三八 暦仁元	十七	鎌倉に留学　念仏・禅を学ぶ
一二四二 仁治三	二一	比叡山へ留学
一二五四 建長六	三三	日蓮と改名
一二六〇 文応元	三九	立正安国論を書く　前執権北条時頼へ献ずる
一二六三 弘長三	四二	伊豆流罪を赦される
一二六八 文永五	四七	北条時宗執権となる～八四
一二六九 〃 六	四八	モンゴル、国書を届けてくる
一二七一 〃 八	五〇	佐渡へ配流ときまる　竜の口の法難　モンゴル、国書を届けてくる
一二七二 〃 九	五一	開目抄を書く　モンゴル、国書を届けてくる
一二七三 〃 十	五二	観心本尊抄を書く
一二七四 〃 十一	五三	佐渡配流赦される　身延山へ入る　文永の役　10月
一二八一 弘安四	六〇	弘安の役　閏7月
一二八二 〃 五	六一	身延下山　池上宗仲邸（本行寺）で入滅　身延山へ葬る

［日蓮像］池上本門寺蔵

［誕生寺］安房・小湊

［久遠寺祖師堂］身延山

［日蓮聖人祖廟］身延山

▼法華経

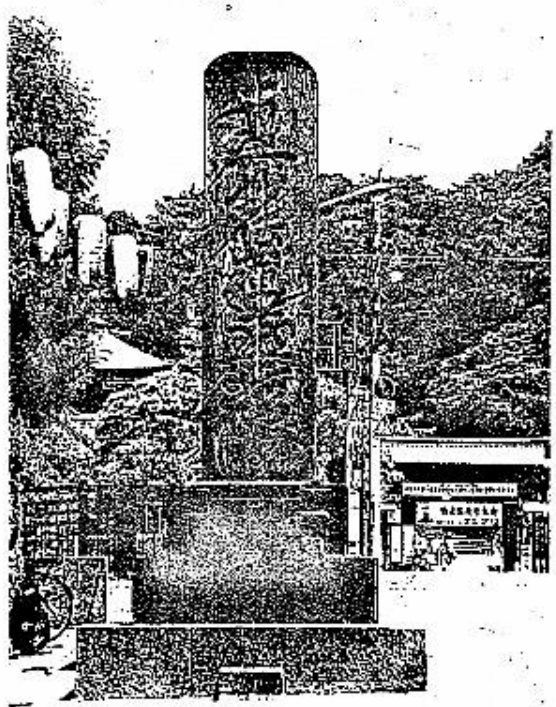
妙法蓮華経　真っ白い妙なる真理の教えを説く経典。経王。
妙法＝素晴らしい教え。正しい教え。
蓮華＝泥水（世間）の中に咲く、気高い花。
釈迦の久遠成仏を説き、諸経典の中で最も高遠な妙法を開示した経。
紀元前後成立　八巻　二十八品（章）からなる。
前半の十四品は迹門、後半の十四品は本門。

十六寿量品　釈迦は、はるか以前から仏になっており、入滅したあとも、今も常に人々のそばにいる。

二十五観世音菩薩普門品　観音経。観音菩薩の功徳を説く。
観音が衆生の難儀を救い、願いをかなえ、あまねく教化することを説く。

教義としてはっきりわかる文章はなく、たとえ話が多い。
聖徳太子・最澄・空海・法然・親鸞・道元・日蓮は法華経を学んで、仏法を完成させた。
中国の智顗（ちぎ）は「法華経のみが釈迦の真意を伝えており、他の経典は、この経の序説にすぎない」として天台宗をひらいた。
最澄（伝教大師）は、中国で法華経を学んで、日本天台宗をひらいた。日本天台宗では「法華経に従えばだれでも仏になれる」としている。本覚思想という。

日本仏教は、どこまでいっても法華一乗の国で、「法華経」によって日本はつくられている。すべて「法華経」をもとにして、日本仏教はつながっていく。
「法華経」は、人間はみんな弱いんだ、みんな一人では生きていけないんだ、だから手をとりあって「法華経」を広めようという。
「法華経」は、弱者が集まって、仲間をつくって宣伝していく。
もともと弱い者があつまり、そういう人にまた、声をかけて救ってあげようというのが本当の精神である。
救われない人に声をかけてこちらを向かせ、ともに尊ぶ仏国土を築いて、さとりの道を教えてあげようというのが、本当の「法華経」の教えである。


［題目碑］池上本門寺

▼日蓮の主張

●四箇格言

一　念仏無間

念仏宗は無間地獄におちる。法然の浄土宗を折伏するのは、釈迦よりも阿弥陀仏を信仰の中心においていることを責めている。

二　禅天魔

禅思想は天魔である。教外別伝・不立文字（教説外に体験によって真理が伝わる）など経典を否定している。

三　真言亡国

釈迦よりも大日如来を信仰の中心としている。祈祷によって国難を除こうとする莫大な祈祷料が国の収支を危うくする。

四　律国賊

わずらわしい戒律にとらわれて「法華経」の説くところを軽蔑して、釈迦の本旨に背く。

●三大願

一　我れ日本の柱とならむ。

二　我れ日本の眼目とならむ。

三　我れ日本の大船とならむ。

▼日蓮の自信

日蓮という個人名が宗名になっているのは例がない。日蓮のはげしい気迫がうかがえる。

日蓮は自信に満ちており、自分のことを「日本国第一の棟梁」「日本第一の法華経の行者」と称したことは史上に名高い。

その自信のもとに、鎌倉幕府を相手どり「自説を用いなければ、日本は滅びるであろう」と真っ向から折伏した。

佐渡流罪を体験したのち、いっそう高まりをみせて、ついには法華経信仰では天台智顗、伝教最澄以上になったとの確信をもった。

法華経こそが釈迦の本当の教えを伝えるとした。

▼題目

「南無妙法蓮華経と唱えよ。必ず口に出して唱えなければいけない。そうでないと、信じたことにならない」

「口に出して妙法蓮華経をよべば、自分の奥にある仏性が妙法蓮華経によばれて現れてくる」

と教えている。

リズム感と力強さは、信仰による勇気を人々に与え、法華太鼓の響きがさらに強調する。強烈な祈りをささげるときに独特の効果を発揮する。

浄土教が来世の極楽往生を説くが、それよりも現実のこの世を理想の世界にすべきだと主張した。各宗が個人の救いを基本としているのに対して、日蓮宗の主張は、社会全体として精神改革を説いている。攻撃的・行動的な日蓮宗は、他宗から反発をもたれることがおおかった。

▼日蓮と元寇

一　法華経を信じなければ、元軍の侵入（他国侵逼）は、非法政治のおこなわれている国への警戒である。

二　「敵国降伏」「怨敵退散」の祈祷はおこなっていない。

三　元の使者を斬った日本の指導者へ抗議の姿勢

日本国ノ敵ニテ候念仏・真言・禅・律ナドノ法師ハ切レズシテ、科ナキ蒙古ノ使ノ頸ヲ刎ラレケル事コソ不便ニ候へ

［元寇防塁］福岡市今津

［元寇の終末戦場］長崎県鷹島・牧の岳史跡公園

▼日蓮の特色

一　現在の日本人の精神生活の中で、日蓮は数少ない宗教家である。戦後日本の新宗教ブームは、七〇〇年をへだてて日蓮の再興といえる。

二　日本人の高僧にはめずらしい「闘性」と「攻撃性」がある。

三　日蓮の反論は、法をふまえての発言である。自己・自国の利益のためではない。

▼日蓮信者

加藤清正	戦国武将	
京都の町衆	京都の豪商たち	
本阿弥光悦	安土桃山時代の工芸家	
狩野永徳　長谷川等伯	安土桃山時代の絵師	
近松門左衛門	江戸中期　戯曲作家	
菱川師宣	江戸初期　浮世絵師	
葛飾北斎	江戸後期　浮世絵師	
田中智学	明治時代　国柱会を主宰　日蓮主義を広める	
井上日召	昭和七年　血盟団事件の主謀者　無期懲役　昭和十五年　紀元二六〇〇年の恩赦で出獄	
北一輝	昭和十一年　二・二六事件の精神的指導者　刑死	
石原莞爾	関東軍作戦主任参謀　戦後病死	
宮沢賢治	大正・昭和　詩人	
山本五十六	昭和十八年　連合艦隊司令長官、戦死	
尾崎秀実	昭和十九年　ゾルゲ事件で刑死	

▼本院（鬼子母神）

［鬼子母神堂］

鬼子母神とも。この神の分布が西北インドからパキスタンにかけて、ザクロの産地と一致する。夜叉神パーンチカの妻というヒンズー教の伝承がある。ザクロの実が多いことから多産を象徴する。多くの子を抱く像もある。

仏教では、他人の子をとって食べていた訶利帝母の末子を釈迦がかくして、彼女の非行を悔いあらためさせた説話を伝える。法華経では、衆生は「仏子」とされ、鬼子母神は十羅刹女の代表とみなされる。法華経を受持する者を守ることを誓ったとする。鬼形になったのは、名前に「鬼」が入っていることや、天台・真言の祈祷が、不動や明王などの忿怒尊を主神とすることから影響をうけたと考えられる。

▼荒行

二月十日、法華経寺の境内は、寒中百日の「荒行」を成満した行僧を迎える老若男女でいっぱいになる。この日、修行を成満した行僧の出行会がとりおこなわれる。日蓮宗加行所の「荒行」は、十一月一日から二月十日までの百日間とりおこなわれる。自分の罪障消滅を願い、苦行に耐えることで、法華経流布への苦難に耐えられる精神を身につける。

午前三時・六時・九時・正午・午後三時・六時・十一時、寒水で身を清める水行。その他は鬼子母大尊神の前での読経三昧である。百日間、行僧は、一日二回のうすい水粥と味噌汁の食事、三時間たらずの睡眠に耐えながら修行をつづける。行僧は鬼子母神に命を預ける形式をとる。

二月十日の出行会には、おおくの檀信徒が出迎える。「荒行」を成満した行僧は、人々を背負って信仰に生きてゆくべく現実社会へ戻っていく。

出行会は行僧と檀信徒との一体感を深める再開である。

荒行をおえた行僧

出行式を迎える檀信徒

▼日常銅像

富木常忍（日常）は、因幡国富城郷の出身。
下総国守護・千葉介頼胤の家来で、千葉介は政務に通じていた富木氏を招いて事務処理にあたらせていたという。
富木氏などの下総の武士たちは日蓮との関係をふかめ、これに帰依していた。
富木氏と日蓮との往復文書はしばしばおこなわれて、富木氏は日蓮の最有力の檀越となっていた。
中山法華経寺は、日常を開山としている。

▼釈迦如来坐像

高さ三・五六m、膝張り二・八m。背面中央に胎内に通じる扉がある。
享保四年（一七一九）「四海安泰　五穀成熟」「檀門勃興　庶民快楽」（銘文）を祈念して造立された。
江戸神田鍋町の鋳物師・太田駿河守藤原正義が鋳造したとある。

▼さざれ石

学名は「石灰質角礫岩」という。
石灰岩が雨水に溶ける。その水は粘性がつよく、地下で小石をあつめて大きくなり、やがて地上にあらわれて「さざれ石」となる。
この石は岐阜県揖斐郡春日村にあったものである。

▼五重塔

元和八年（一六二二）、本阿弥光室の本願により建立された。加賀藩主前田利光の寄進によるという。

総高三〇・七m、初重幅四・九m（池上・本門寺、上野・寛永寺五重塔とほぼ同じ）。

初重の内部のみが部屋になっており、朱塗りの須弥壇、板曼荼羅の本尊、釈迦如来・多宝如来の二像を安置する。

二重以上は構造材が組まれた屋根裏である。

市川梨園